九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

スペイン語の法性と時制 : 認識的法表現と時制の解釈を中心にして

山村, ひろみ

https://doi.org/10.15017/6787715

出版情報：言語科学. 58, pp.1-19, 2023-03-07. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

スペイン語の法性と時制

―認識的法表現と時制の解釈を中心にして―*

山村　ひろみ

0. はじめに

スペイン語の法表現(expresiones modales)の時制の解釈は、それが表す意味によって異なることが知られている。以下の RAE y ASALE (2009) の *Nueva gramática de la lengua española* (以下、*NGLE*)の記述を見られたい。

(1) "(...), la oración *Los dinosaurios pudieron extinguirse en el Cretácico* admite la paráfrasis *Es posible que los dinosaurios se extinguieran en el Cretácico*, pero rechaza *Fue posible que los dinosaurios se extinguieran en el Cretácico*, es decir, la variante en que se da al pretérito un ámbito mayor que el modal." (RAE y ASELE 2009: 23.10o, p.1767)

((中略), *Los dinosaurios pudieron extinguirse en el Cretácico* (ディノサウリスは白亜紀に消失したかもしれない)という文は *Es posible que los dinosaurios se extinguieran en el Cretácico* (ディノサウリスは白亜紀に消失した可能性がある) にはパラフレーズされるが、*Fue posible que los dinosaurios se extinguieran en el Cretácico* (ディノサウリスは白亜紀に消失する可能性があった)、つまり、法 (modal) よりも過去 (pretérito) により大きなスコープが与えられたバリアントは拒否する。)

(2) "En cambio, en los auxiliares que expresan capacidad, obligación y otras propiedades atribuibles a los individuos (llamados comúnmente *radicales* o *personales* ...), el tiempo verbal posee un ámbito mayor: *Al final, pude hablar con él*." (Ibid.)

(一方、能力や義務といった個人に帰される属性を表す(一般にいわゆる radical(根源的)あるいは人称的と呼ばれる)助動詞では、時制がより大きなスコープを持っている *Al final, pude hablar con él*.(ついに、私は彼と話しをすることができた)) 。

(1)、(2)によれば、法助動詞 *poder* が pretérito perfecto simple (単純完了過去[1]、以下、ps)によって表されるとき、ps の時間情報が限定するスコープは当該助動詞の意味によって異なる。すなわち、*poder* が不定詞の示す事態の可能性を表すいわゆる認識的表現(expresión epistémica)として解釈されるとき、ps のスコープは不定詞の示す事態には及ぶが、法的部分、つまりその可能性を示す部分までには及ばない。そのため *Los dinosaurios pudieron extinguirse en el Cretácico*(ディノサウリスは白亜紀に消失したかもしれない) はコピュラ動詞 *ser* の現在形 *es* を用いた *Es posible que los dinosaurios se extinguieran en el Cretácico* (ディノサウリスは白亜紀に消失した可能性がある)にはパラフーレズされても、同じコピュラ動詞 *ser* の ps である *fue* を用いた *Fue posible que los dinosaurios se extinguieran en el Cretácico* (ディ

---

* 本稿は 2022 年 8 月 25 日関西学院大学梅田キャンパスで開催された SELE2022(日本スペイン語学セミナー2022) で発表した「法性と時制―認識法表現と時制の解釈を中心にして」の内容の一部を修正・加筆したものである。なお、本稿は JSPS 科研費 JP18H00667 の助成を受けている。

[1] 日本のスペイン語教育の場では、一般に「点過去」と呼ばれている時制形式である。

ノサウリスは白亜紀に消失する可能性があった)にはパラフレーズされないというのである。一方、(2)の説明によれば、同じ *poder* が能力や義務など主語の属性を表すいわゆる根源または人称助動詞(verbo auxiliar radical/personal)として解釈されるときには、時制が法性(modalidad)よりも大きなスコープを持つという。このことは、実際、*Al final, pude hablar con él.*(ついに、私は彼と話しをすることができた)が、*Al final me fue posible hablar con él*(ついに私が彼と話しをすることが可能になった) のように、コピュラ動詞 *ser* の ps を用いてパラフレーズすることができることによって示される。

以上のことを踏まえ、本稿が論じるのは、次の二点である。ひとつは、ps によって表された *poder* 文における ps が限定するスコープと *poder* の意味の関係は具体的にどのように解釈されてきたかということである。この点については、スペイン語の法性と法表現についてまとめた Bravo (2017)、また、これまで法性と時制の関係について継続的に研究を続けてきた Laca の一連の論稿 (Laca 2006, 2007, 2014, 2021)を参考にしながら考察していきたい。もうひとつは、スペイン語の法性と時制の関係についてこれまで提示されてきた一般的解釈の妥当性の検証である。この検証にあたっては、Real Academia Española (以下、RAE と略記) が作成したデータベース CREA、CORPES、さらに、Google の「詳細検索」を利用しながら、特に、認識的法表現として解釈された *poder* に対する Bravo (2017)、また、Laca の論稿の解釈がどの程度その実態を反映したものかを見ていく。

以下、本稿の構成は次のとおりである。第 1 節では、Bravo (2017)を基に、スペイン語における法性および法表現とは何か、続く第 2 節では、同じく Bravo (2017)および Laca の論稿に従い、法性と時制の一般的解釈を確認する。そして、第 3 節では、法表現の中でも特に認識的法表現と時制解釈の関係に焦点をあて、主に Laca (2021) を基に論じる。さらに、第 4 節では、それまでの節で確認された法表現と時制の関係の一般的解釈の妥当性を前述のデータベースを利用し確認する。最後の第 5 節では、それまでのまとめと今後の課題について述べる。

1. 法表現とは何か：Bravo (2017) を参照して

本節では、スペイン語における法性、法表現とは何かを Bravo (2017)を基に見ていく。Bravo は、スペイン語における法性とは何かについて、次のように説明している。

(3) a. El lenguaje nos permite calificar el contenido semántico expresado por una oración, y cuyo término exacto es proposición, como POSIBLE o NECESARIO. (Bravo 2017: 27)
(言語によって、私たちは文（正確には命題であるが）によって表された意味内容を「起こりうる(POSIBLE)」あるいは「必然的に起こる(NECESARIO)」ものと形容する(calificar)ことができる。)

b. Una proposición calificada como posible o necesaria es una proposición modalizada. La categoría lingüística relacionada con la expresión de la necesidad o la posibilidad es la modalidad. (Ibid.: 27-28)
(「起こりうる(posible)」あるいは「必然的に起こる(necesario)」と形容された命題は叙法化された命題 (proposición)である。必然性あるいは可能性の表現と関係した言語範疇は法性 (modalidad)である。)

c. La modalidad como fenómeno lingüístico tiene naturaleza TRANSCATEGORIAL. Es decir, se puede expresar mediante verbos modales, adverbios, adjetivos e incluso mediante sufijos y morfemas flexivos. (Ibid.: 28) (言語現象としての法性は超範疇的な性質を持つ。すなわち、それは法動詞、副詞、形容詞さらには接尾辞や屈折形態素によっても表されうる。)

(3a)、(3b)によれば、法性とは命題を「起こりうる」あるいは「必然的に起こる」ものとして形容する(calificar)ものであり[2]、(3c)から、それはいわゆる法動詞、副詞、形容詞のみならず、接尾辞、動詞の形態素といった様々な形式によって表されるものと理解されていることが分かる[3]。

次に、Bravo (2017: 21)は、命題の可能性あるいは必然性は法性の源(fuentes de modalidad)と呼ばれるものによって決定されるが、それらは次のように分類されるとする。まず、その可能性あるいは必然性が論理的に決まるもので、それを Bravo は真理的法性(modalidad alética/apódica)と呼んでいる。次に、その可能性あるいは必然性が我々の世間知によって決まるもので、それを Bravo は認識的法性(modalidad epistémica)としている。また、その可能性あるいは必然性が何らかの規準(norma)によるものは義務的法性(modalidad deóntica)と呼ばれている。さらに、ある人やモノの能力による可能性あるいは必然性を動的法性(modalidad dinámica)と呼んでいるという。Bravo (2017: 22)によれば、これらのほかに、その可能性あるいは必然性が状況・文脈によって決まる状況的法性(modalidad circunstancial)、その可能性あるいは必然性が目的によってきまる目的論的法性(modalidad teleológica)もあるが、言語学の関心はもっぱら認識的法性、義務的法性、動的法性にある(Ibid.: 26)といい、スペイン語の法性のタイプをその源に従って表 1 のようにまとめている。

表 1: Bravo (2017: 26)による法性のタイプ（日本語訳は筆者）

TIPOS (タイプ)		FUENTE (源)
ALÉTICA (真理的)		Razonamiento lógico independiente de la experiencia: verdades analíticas (経験とは無関係の論理的推論：分析的真実) *Necesariamente, un triángulo tiene tres lados.* 必然的に三角形は三辺を持つ。
EPISTÉMICA (認識的)		El conocimiento del mundo (世間知) *Juan debe de tener 40 años.* フアンは 40 歳に違いない。
DINÁMICA	DEÓNTICA (義務的)	La norma (基準) *Juan puede tener cuarenta años cuando se presente al concurso.* コンクールに出場する際、フアンは 40 歳でもよい。
	DINÁMICA (動的)	Las capacidades de seres y entidades (生物とモノの能力) *Las ranas pueden respirar debajo del agua.* カエルは水面下で呼吸ができる。 *Este coche puede alcanzar los 100 Km/h en 4 segundos.* この車は 4 秒で時速 100 キロに達することができる。

[2] このことを Bravo (2017: 18)は次のように図示している。命題 (proposición)を *p* とし、「必然性がある(necesario)」あるいは「可能性がある(posible)」ということを POS, NEC で表すならば、叙法化された文はそれぞれ NEC p 'Necesariamente(必然的に) ~ Con toda seguridad (まったく確信して) p'、POS p '{Posiblemente (おそらく)/Es posible (可能性がある)} que p' と表されることになる。

[3] Bravo (2017: 17-18)は法動詞として *poder, deber (de), tener que, haber que, haber de*、法性を表す形容詞として *posible, probable, necesario, presunto, conveniente, urgente imprescindible*、法性を表す副詞(句)として *quizás, tal vez, puede que, probablemente, a lo mejor*、法性を表す名詞として *posibilidad, obligación*、法性を表す接尾辞として *–ble*、法性を表す屈折形態素として *Juan estará en estos momentos en su casa* (フアンは今頃家にいるだろう)、*En aquel momento, Juan estaría llegando* (あのときフアンは到着しつつあっただろう)のような推量を表す未来形と過去未来形をあげている。

表 1 では、義務的法性と動的法性が同じ動的法性の下にまとめられているが、これは先に見た (2) で *NGLE* が *los auxiliares que expresan capacidad, obligación y otras propiedades atribuibles a los individuos (llamados comúnmente radicales o personales)*(能力や義務といった個人に帰される属性を表す (一般にいわゆる根源的あるいは人称的と呼ばれる)助動詞)に相当するものである。

また、(3c)では、法性は「超範疇的 (trancategorial)」なものであると指摘されたが、それを示すために Bravo (2017: 27)は表 2 をあげている。

表 2: Bravo (2017: 27)によるスペイン語の中でもっとも重要な法表現（日本語訳は筆者）

TIPO DE MODALIDAD (法性タイプ)	NEC p (必然性+命題)	POS p (可能性+命題)
EPISTÉMICA (認識的)	*Deber (de), Haber de, Tener que*, (...に違いない) Futuro y condicional de probabilidad (推量の未来と過去未来) *Con toda seguridad, Muy probablemente, Casi seguro* (ほとんど確かな)	*Poder, Caber que, Puede que, es posile que, a lo mejor, tal vez* (...かもしれない、おそらく、たぶん), *No tener por qué* (...するはずがない)
DEÓNTICA (義務的)	*Deber (de), Haber de, Haber que, Tener que* (...しなければならない)	*Poder, Serle posible a alguien algo* (...することができる), *No tener por qué* (...する必要はない)
DINÁMICA CIRCUNSTANCIAL (状況動的)		*Poder, Saber, Caber, Ser capaz* (...することができる)

表 2 で注目すべきは、「認識的法性」、「義務的法性」、「動的法性」の 3 つの法性タイプに記載されている *poder* のように、同一の表現が複数の法性を表すことができるという点である。このことについて、Bravo (2017: 18)は次のように述べている。

(4) Una misma expresión modal puede ser interpretada respecto de más de una fuente de modalidad. Esta es de hecho la situación más habitual, de manera que se entiende que las expresiones modales no es que sean polisémicas, sino que son ambiguas entre varios significados posibles:el epistémico, el deóntico, el dinámico.
(同一の法表現は 1 つ以上の法性の源から解釈されうる。実際、それがもっとも普通の状況なので、法表現は多義ではなく、認識的、義務的、動的といった様々な可能な意味の間で曖昧であると理解される。)

問題は、このように複数の可能な意味の間で曖昧であるという法表現とその時制解釈がこれまでどのように理解されてきたかという点にある。次節では、それを再び Bravo (2017)に基づきながら見ていく。

2. 法表現と時制の解釈

法表現と時制の解釈について、Bravo (2017: 78)は次のように述べている。

(5) Si el verbo modal se interpreta como epistémico, la información temporal que aparece en el verbo modal localiza el estado de cosas descrito en la proposición que se modifica: MODAL EPISTÉMICO > TIEMPO.
(法動詞が認識的と解釈されるならば、法動詞に現れる時間情報は、修飾(限定)された命題で記述された事態を定位する。すなわち、「認識的法性＞時制」ということである。)

Bravo (2017: 64)によれば、(5)の「認識的法性＞時制」というのは時制が認識的法性のスコープ内にあることを示すが、それでは、ps で表出された認識的法動詞自体の時間情報はどのように解釈されるのだろうか。それに対して、Bravo (2017: 78)は、次のように述べる。

(6) El tiempo de evaluación de un verbo modal epistémico es el momento de la enunciación o, en condiciones más restringidas, un momento del pasado que funcione como tal. Esta restricción, de tipo semántico, determina que el paradigma de los tiempos de los verbos modales epistémicos se limite al presente y al imperfecto (de indicativo), (...)
(認識的法動詞の評価時 (tiempo de evaluación) は発話時 (momento de la enunciación)あるいは、より制約された条件においては、そのように機能する過去の時点である。この意味論的制約により認識的法動詞の時制パラダイムは直説法現在と imperfecto (pretérito imperfecto 不完了過去[4]、以下 imp)に限られることになる、(中略)。)

(6)によれば、認識的法動詞は、表面上どのような時制によって表出されていても、その評価時は現在あるいは imp ということになる。ここで「発話時」のように機能する過去の時点として imp があげられているのは、それが現在形の「時制の一致」を受けた時制だからである。すなわち、imp は、発話時を基準時とする現在形の基準時が過去のある時点にシフトとした際の形式なのである。

一方、同じ法動詞でも認識的法動詞以外の義務的法動詞、動的法動詞の時間情報は認識的法動詞のそれとは異なった解釈になる。Bravo (2017: 79)の以下の記述を見られたい。

(7) Si el verbo modal se interpreta como deóntico, la información temporal que aparece en el verbo modal se interpreta en el mismo modal: TIEMPO >MODAL RADICAL (DINÁMICO)
(法動詞が義務的と解釈されるならば、法動詞に現れる時間情報はその法動詞自体において解釈される。つまり、「時制＞根源的(動的)法性」になる。)

(7)の「時制＞根源的(動的)法性」というのは根源的(動的)法性が時制のスコープ内にあることを示すが、これは法動詞の時間情報はそれが表出された時制のとおりに解釈されるということを示す。

以上の認識的法動詞の時間情報と認識的法動詞以外の法動詞の時間情報の解釈上の違いを Bravo (2017: 64、英語のグロスと日本語訳は筆者)は、次のような例をあげながら、具体的に説明している。

---

[4]日本のスペイン語教育の場では、一般に「線過去」と呼ばれている時制形式である。

(8) Juan ayer pudo llamar.
(Juan yestserday poder.3sing.ps. call.infinitive)
(i) 'Es posible que ayer Juan llamara. Por lo que yo sé, es posible que Juan llamara'. (Lectura epistémica)
昨日フアンが電話をかけたかもしれない。私が知る限り、フアンが電話をかけた可能性がある。(認識的読み)
(ii) 'A Juan ayer le fue posible llamar; Juan ayer tuvo permiso para llamar." (Lectura radical)
昨日フアンにとって電話をかけることは可能だった。フアンは昨日電話をかけるための許可を得た。(根源的読み)

(8)によれば、*Juan ayer pudo llamar* という法動詞 *poder* の ps によって表された文には、*poder* が認識的法動詞として解釈された認識的読みと同動詞が動的法動詞あるいは義務的法動詞として解釈された根源的読みの 2 つの読みが可能であり、その読みに従い ps の時間情報が解釈されるところは異なってくる。まず、*poder* が認識的法動詞として解釈されるときには、(8i)が示すように、「可能性がある」という評価の時点は発話時にあることから、それは *es posible* のように現在形で表されることになる。そして、*pudo* という *poder* の ps の時間情報は *es posible* の従属文中の *llamara* という形式で時制化された命題に対応するものとなる。つまり、認識的読みの *poder* では、その時制は常に *poder* の補語の不定詞が示す事態の時間情報を示すということである。一方、*poder* が根源的法動詞として解釈されるときには、(8ii)のパラフレーズが示すように、*poder* の時制の情報は *poder* 文全体をそのスコープに入れることになる。

以上、Bravo (2017)に従い、スペイン語の法表現と時制の一般的解釈を見てきた。ここで特に問題になるのは、認識的法動詞と時制の解釈である。なぜならば、すでに見たように、認識的法動詞においては、それを表出する時制形式とその時制解釈が一致しないからである。

3. 認識的法表現と時制の解釈

Laca (2021: 9、太字は筆者) によると、前節で見た認識的法動詞の時制形式とその時制解釈に見られる不一致は、以下に示すように、スコープ逆転 (inversión de ámbito) というメカニズムで説明されてきたという。

(9) La mayor parte de los análisis de la interacción entre modales y morfología aspectuo-temporal producidos en los últimos veinte años introduce mecanismos de **inversión de ámbito** más o menos elaborados para dar cuenta de esta discrepancia entre ámbito sintáctica y ámbito semántico (...)"
(ここ 20 年の間に行われてきた法動詞とアスペクト・テンスの形態論の間の相互作用の分析のほとんどは、多かれ少なかれ、この統語的スコープと意味的スコープの間に見られる不一致を説明するために考案された**スコープ逆転**というメカニズムを導入している。)

Laca (2006:10、丸括弧内は筆者)は(9)で提示されたスコープ逆転を、次のように示している。

(10) a. [T [MODAL [SV]]] (形態統語構造のスキーマ)
b. [MODAL [T [SV]]] (意味構造のスキーマ)

(10a) は認識的法動詞における法性と時制の形態統語構造のスキーマを表したものであり、(10b)はその意味構造のスキーマを表したものである。ここでT(iempo, 時制)とMODALのスコープの関係を見ると、(10a)ではMODALがTのスコープ内にあるのに対し、(10b)では逆にTがMODALのスコープ内にあることが分かる。Laca (2021)によれば、(10a)と(10b)の間に見られるこのようなスコープ逆転を説明するために、これまでいろいろな統語的な解決策が提示されてきたというが、Laca自身は、次のようにまとめている。

(11) En resumen, los casos de "inversión de ámbito" - (...) - pueden analizarse satisfactoriamente suponiendo que el tiempo pasado en cuestión se combina semánticamente con el complemento del modal, pero por razones morfológicas su exponente solo puede ser albergado por el modal. (Laca 2021: 14)[5]
(要するに、「スコープ逆転」のケースは、ー(中略)ー当該の過去時制は法動詞の補語と意味的に組み合わされるが、形態論的理由により、その表出は法動詞にのみ留め置かれると考えれば、満足に分析される。)

しかし、ここで本稿が注目したいのは「スコープ逆転」というメカニズムが必要とされる証拠である。なぜならば、Laca (2006: 11)も指摘するように、「スコープ逆転」という手続きは言語の理論的観点から見れば負担の多いもので[6]、認識的法動詞における時制形式と時制解釈の不一致を説明するためにあえて「スコープ逆転」というメカニズムを導入するには非常に強い経験的証拠(indicios empíricos muy fuertes)が要求されるからである。この点に関して、Laca (Ibid.)があげているのが次の現象である。

(12) a. En aquella época, <u>tenía</u> (tener「持つ」の imp) alrededor de veinte años.
あの当時、彼は20歳前後だった。
b.*En aquella época, <u>tuvo</u> (ten*er* の ps) alrededor de veinte años.

(13) a. En aquella época, <u>podía</u> (poder の imp) tener alrededor de veinte años.
あの当時、彼は20歳前後だったかもしれない。
b.*En aquella época, <u>pudo</u> (poder の ps) tener alrededor de veinte años.

---

[5] Laca (2021)自体は認識的法動詞と時制の関係のみならず、動的法動詞と時制の関係、さらに、それらの法動詞とアスペクトの関係についても扱っている。その結果、認識的法表現と時制、アスペクトは、[Modal epistémico > Tiempo] (「認識的法性>時制」)、[Tiempo > Modal epistémico > Aspecto] (「時制>認識的法性>アスペクト」)のスコープ関係が可能なことから、"*Asp es un límite inferior para los modales en lectura epistémica.*"(アスペクトが認識的読みの法動詞にとって下限である)とし(Laca 2021:12)、動的法表現と時制、アスペクトは、[Tiempo>Modal dinámico](「時制>動的法性」)、[Aspecto >Modal dinámico](「アスペクト>動的法性」)、[Modal dinámico>Aspecto](「動的法性>アスペクト」)のスコープ関係が可能なことから、"*T es un límite superior para los modales en lectura radical.*" (時制が根源的読みの法動詞にとって上限である)としている (Ibid.)。

[6] Laca (2006:10-11)によれば、認識的法動詞に見られる時制形式とその解釈の不一致は、「移動(movimiento)」を用いて統語的に解決することができるかもしれないが、それは "costoso (費用がかかる)"と述べている。

(12)は *tener alrededor de verinte años* (...は20歳くらいである)という年齢表現の imp と ps の表出である。(12a)、(12b)から分かるように、過去の年齢表現は imp で表されるのが一般的で ps による表出は難しい。今このような特徴を持つ年齢表現を認識的法動詞 *poder* の補語とすると、その過去形は、過去の年齢表現のそれと同じ imp になり ps にはならない。これは、認識的法動詞の時制がその認識的法動詞を欠いた命題が表される時制と一致する、または、認識的法動詞の時制は、その法動詞によって修飾されていない命題の時制を反映したものになることを示したものである。Laca (Ibid.)によれば、認識的法動詞の時制形式とその解釈に見られる不一致を「スコープ逆転」というメカニズムで説明しようとする先行研究は、このように、当該法動詞に見られる時制形式とその補語に置かれた命題を表す時制とが一致することをその証拠としているのだという。

4. 認識的法表現の時制解釈の検証

以上、認識的法表現の時制解釈を見てきた。その結果、①認識的法表現における時制形式とその解釈については不一致が見られ、当該法表現の時制形式はその法表現の時間情報を表すのではなく、当該法表現の補語部分に置かれた命題の時制を表すと理解されていること、②そのような認識的法表現の時制形式とその解釈の不一致はこれまで「スコープ逆転」というメカニズムで説明されてきた、ことが分かった。しかし、そのような解釈には、どの程度の妥当性があるのだろうか。ここで「妥当性」というのは、同解釈がどの程度スペイン語の実態を反映したものなのか、ということを指す。本節では、上で見た認識的法表現における時制形式とその解釈についての従来の解釈の妥当性を検証するために、以下のようなことを行った。

先の「スコープ逆転」の証拠として提示されたように、スペイン語の事態の中には、時刻の表現や年齢表現のように、その過去形が専ら imp で表され ps で表される際には特別の文脈を必要とするものがある。そこで、まず、そのようなそれを表出する過去時制に制約のある事態を補語とした *poder* の時制の実態を観察した。具体的には、通常 imp で表される事態が ps によって表された *poder* の補語部分に出現するか否かを観察した。また、先行研究によれば、認識的法動詞の時制パラダイムは現在あるいは imp と指摘されていたが、その表出時制が ps である事例があるか否かを *poder* 以外の認識的法表現を対象に調べた。さらに、先行研究が導入した「スコープ逆転」というメカニズムを応用すると問題になるような認識的法表現の事例についても調べた。なお、以上の観察にあたっては、Real Academia Española 作成のデータベース CREA、CORPES、さらに、Google の「詳細検索」を用いた。

4.1. 時刻表現、年齢表現を補語とする認識的法動詞 *poder* が ps で表された事例

スペイン語の時刻表現、年齢表現の過去形は一般に imp で表出され、それらの表現を補語とする認識的法動詞 *poder* の過去形も同じく imp で表出されることを根拠に、先行研究は「スコープ逆転」の有効性を主張していたが、本稿の観察によれば、それには次のような反例が存在することが確認された[7]。

---

[7] ここに提示された事例は、次の方法で収集されたものである。時刻表現を補語とする認識的法動詞 *poder* の ps による表出については、*pudo/Pudo ser la una* あるいは *pudieron/Pudieron ser las...*を検索対象とし、ヒットしたものの中から時刻表現と見なすことができたものを抽出した。また、年齢表現を補語とする認識的法動詞 *poder* の ps による表出については、*pudo/Pudo tener* を検索対象とし、ヒットし

(14) Por más que trataron de identificarla, no fue posible. Entre la bolsa de su pantalón color negro no traía alguna credencial que ayudara a revelar su nombre. Se estimó que pudo tener alrededor de 45 años de edad. (https://www.debate.com.mx/policiacas/Entre-basura-y-monte-dejaron-un-muerto-cerca-de-La-Costerita-20190423-0029.html)
(どんなに彼女の身元を割り出そうとしても、それは不可能だった。その黒いズボンのポケットには名前を明かすのを助けるような身元保証書は何もなかった。年齢は45歳前後かもしれなかった[8]と評価された。)

(15) Ella vivió en la época en que muchas personas en Escandinavia comenzaron a evolucionar el cabello rubio. Ella pudo tener alrededor de 45 años cuando murió y murió de hambre y fue enterrada bajo tierra. (https://es.quora.com/C%C3%B3mo-sobrevivieron-los-cazadores-recolectores-en-Escandinavia-Finlandia-en-el-invierno)
(彼女はスカンジナビアの多くの人々が金髪を進化させ始めた時代に生きた。彼女が死んだのは45歳前後かもしれなかったが、飢えで死に、地下に埋められた。)

(16) Uno de los chicos estuvo esa noche, pero no recuerda la hora y comenta: "pudieron ser las 8 (de la noche) o pudieron ser las 3 de la mañana, pero recuerdo que sus gritos se escuchaban por todo el lugar". (https://piedepagina.mx/justicia-para-odalys-demandan-juicio-por-feminicidio)
(若者たちのひとりがその夜いたが、時間は覚えておらず、「夜の8時かもしれなかったし、朝の3時かもしれなかったが、彼女の叫び声がその場所中に聞こえたのは覚えている」と語っている。)

(14)、(15)は年齢表現、(16)は時刻表現をその補語とした認識的 *poder* 文であるが、ps で表されていることから、「スコープ逆転」の反例といえる[9]。

たものの中から年齢表現と見なすことができたものを抽出した。なお、CREA と CORPES については、検索地域は「スペイン語圏全域」、検索の時期は「制限なし」とした。Google の「詳細検索」については、上述の検索対象を検索言語「スペイン語」、検索地域「制限なし」、検索時期「制限なし」で検索した。以下、事例の問題部分には下線が引かれている。

[8] 認識的法動詞 *poder* が imp で表出されている場合には「だったかもしれない」という日本語訳になろうが、当該法動詞が ps で表出されているので「かもしれなかった」という日本語訳にした。以下、(15)、(16)も同様。

[9] *poder* 以外の認識的法表現でも同じ現象は確認された。例えば、「...に違いない」という認識的意味を表す "*deber (de)*+ 不定詞"の ps による表出の中にも、次の例のように、その補語が時刻表現あるいは年齢表現のものがあったからである。

Yo creo que todo pasó hace como cuatro o cinco años. Debieron ser las ocho o nueve de la mañana, porque yo apenas estaba abriendo el almacén. (https://pacifista.tv/notas/ancianos-victimas-de-la-guerra-la-voz-muda-del-conflicto/) (すべて4、5年前に起こったように思う。午前8時あるいは9時に違いなかった、なぜなら私はやっと倉庫を開けているところだったからだ。)

Se dice que estuvo presente en la batalla de Sauchieburn el 11 de junio de 1488 y que luchó por el rey; pero esto es dudoso, ya que entonces debió tener más de ochenta años. (https://hmong.es/wiki/Malise_Graham,_1st_Earl_of_Menteith) (彼は1488年6月11日の Sauchieburn の戦いにおり、王のために戦ったと言われているが、それは疑わしい、というのもそのとき彼は80を超えているはずだったからである。)

4.2. 評価時が現在あるいは imp 以外と解釈される認識的法表現の事例

第 1 節で見た Bravo (2017: 17-18) は法性を超範疇的なものと捉え、法的意味(significado modal)は *poder* (かもしれない)、*deber* (...にちがいない)といった法動詞のほかに、*posible* (起こりうる)、*probable* (起こりそうな)といった形容詞、*quizás*(たぶん)、*puede que* (かもしれない) のような副詞句、*posibilidad* (可能性、見込み)といった名詞も持つとした。実際、先に見た *NGLE* の記述 (1)では、*Los dinosaurios pudieron extinguirse en el Cretácico* という認識的法動詞 *poder* の ps による表出が *Es posible que los dinosaurios se extinguieran en el Cretácico* のように形容詞 *posible* を用いたコピュラ文にパラフレーズされていた。また、このパラフレーズにおいて、*ser posible que...*(...が起こりうる、...かもしれない)のコピュラ動詞 *ser* は現在形で表され、ps によって表されることはないとも説明されていた。*NGLE* のこの説明は、Bravo (2017: 78)も指摘していたように、認識的法動詞の評価時は現在あるいは過去の現在に相当する imp にあるという解釈に基づくものであるが、同時に、その評価時が現在あるいは imp にあるのは単に認識的法動詞だけではなく *ser posible que...*が示すような認識的法表現全般であることを示すものでもある。しかし、そのような解釈は果たしてどの程度スペイン語の認識的法表現の実態に合致しているのであろうか。それを検証するために、本稿は、以下のような観察を行った。

まず、Bravo (2017: 17-18)、また、Bravo (2017:27) の表 2 を参考にしながら、*poder* 以外の認識的法表現を選択し、それらが ps で表出されることがあるか否かを CREA、CORPES および Google の「詳細検索」を用いて確認した。選択された認識的法表現は、"*ser (muy) posible que* + 接続法" (...が(非常に)起こりうる)、"*ser probable que* + 接続法" (...が起こりそうである)、"*puede que* + 接続法" (...かもしれない)、"*puede ser que* + 接続法" (...かもしれない)、"*haber (la) posibilidad de que* + 接続法" (...という可能性がある)である[10]。その結果は以下のようになる。

RAE の *Diccionario de la lengua española* (オンライン版)[11]によれば、"*ser (muy) posible que* + 接続法"という表現中の *posible* という形容詞には、1. que puede ser o suceder (存在しうる、起こりうる)、2. que se puede ejecutar (実現されうる)の 2 つの意味が付与されているが、Rodríguez-Espiñeira (2010: 210-211)によれば、前者の意味は認識的法表現、後者の意味は義務的法表現に対応するという。また、同じく Rodríguez-Espiñeira (Ibid.: 201, 210-211)は、*posible* が持つこれら 2 つの異なる法的意味はそれらが表される統語構造にも反映され、認識的法表現の意味は "*ser posible que* +接続法"、義務的法表現の意味は "*ser posible que* +接続法"と"*ser posible* +不定詞" の 2 つの構文によって表され、"*ser posible* +不定詞" には人称代名詞の与格を付加することもできると指摘している。さらに、Rodríguez-Espiñeira (Ibid.: 205-206)は、認識的意味の "*ser posible que* +接続法" の *ser* の時制は現在、imp に限られるが、"*ser posible* +不定詞" の *ser* は ps を含む様々な時制による表出が可能だとしている。しかしながら、本稿の観察では、数は少ないものの、次のように、認識的と解釈される"*ser posible que* +接続法定動詞" の *ser* が ps によって表出された事例が確認された[12]。

---

10 CREA、CORPES、Google の「詳細検索」で検索するにあたっては、*fue/Fue (muy) posible que...*、*fue/Fue (muy) probable que*、*pudo/Pudo que*、*pudo/Pudo ser que*、*hubo/Hubo (la) posibilidad de que* を検索対象とした。なお、CREA と CORPES については、検索地域は「スペイン語圏全域」、検索の時期は「制限なし」、Google の「詳細検索」については、上述の検索対象を検索言語「スペイン語」、検索地域「制限なし」、検索時期「制限なし」で検索した。なお、本文中の事例は検索された事例の一部である。

11 Cf. https://dle.rae.es/posible

12 実際、CREA、CORPES では、"*ser posible que* + 接続法" の *ser* が ps によって表出されたものは

(17) Pero sobre las relaciones entre Convergència i Unió, los jóvenes historiadores actuales, superando los panfletos publicitarios publicados, tendrán que profundizar algún día en las dos abortadas ocasiones históricas en las que fue posible que Convergència i Unió se convirtiera en un solo partido.
(CREA, *La Vanguardia*, 25/01/1994)
(しかし、Convergència と Unió の間の関係について、若き現在の歴史家たちは、出版された宣伝用パンフレットを乗り越えながら、Convergència と Unió がひとつの政党になるかもしれなかった歴史的な二つの機会についていつか掘り下げなければならないだろう。)

また、Rodríguez-Espiñeira (Ibid.: 215)は、*posible* に程度を表す修飾語が付加されると認識的価値(valor epistémico)が明示的になると指摘しているが、本稿の観察では、以下のように、"*ser muy posible* que +接続法" の *ser* が ps によって表出された事例も確認された。

(18) [Núria Homs] Ha detallado que su preocupación por la muerte y el dolor llegó en un momento en el que él vivía un gran éxito y en el que estaba abriendo la fundación con su nombre, y ha considerado que con 60 años fue muy posible que tuviera conciencia del paso del tiempo y que la proyección de la fundación le planteara un "balance sobre su legado".
(https://www.lavanguardia.com/local/barcelona/20190314/461024206981/la-fundacio-tapies-y-albert-serra-ahondan-en-la-muerte-en-una-exposicion.html)
(Núria Homs は、タピエスの死と痛みについての危惧は彼が大成功をおさめ自分の名前のついた財団を開きつつあった時期に到来したと詳細に述べ、彼が60歳のとき、時の流れを意識し、財団の影響から彼が「自分の遺産についての評価」に着手するということは非常にありえたと考えた。)

次に、"*ser probable que* + 接続法"(...が起こりそうである)における *ser* の時制を見る。Rodríguez-Espiñeira (Ibid.: 196, 216)は、"*ser probable que* + 接続法" は認識的法表現に特化したものであり、*ser* の時制は現在と imp に限定されると述べている。しかし、本稿の観察によれば、次例のように、*ser* が ps によって表出されたものが確認された。

(19) Lo que dicen los historiadores es que William Smith, conocido por ser el primer hombre en pisar la Antártida "encontró restos del San Telmo" tal y como "puede leerse en los propios escritos del marino inglés" recalca Quesada. Se encontraron restos y fue probable que estos naufragos vivieran en la isla de Livinsgton.
(https://www.elindependiente.com/tendencias/historia/2019/12/07/san-telmo-el-navio-espanol-que-pudo-ser-el-primero-en-la-antartida/)
(「歴史家たちが言うのは、南極大陸に初めて足を踏み入れた人として知られる William Smith

確認されたが、そのほとんどすべては義務的法表現であり、なかでも *¿Cómo fue posible que...*?(どのようにして...ということが実現できたのか)という当該事態の生起についての驚き、違和感を表すものが多く、CREA では *fue posible que...* 全 38 例のうち 22 例、CORPES では全 88 例のうち 51 例がこの構文だった。

が、まさにその著作の中でも読みとられるように、San Telmo の残骸を発見したということだ。」と Quesada は強調する。残骸が発見されたのだから、これらの難破者たちはたぶん Livinsgton 島で生きていそうだった。)

また、"*ser probable que* + 接続法" の事例には、次のように、事態の生起の頻度を示す副詞 *siempre* (いつも、常に)と共起したものもあった。

(20) "Los mercados pueden ser lugares abarrotados por lo que, como en Wuhan, ayudan a propagar el brote", dijo, en referencia a la ciudad china donde se originó el virus. "China le dio al mundo el virus y siempre fue probable que se lo devolviera. (...) " agregó. (https://jp.reuters.com/article/instant-article/idESKBN23N0NZ)
(彼は「市場は人でいっぱいになりうる場所で、そのため、Wuhan (武漢)のように、感染が広がるのを助けることになる」と言ったが、それはウィルスが発生した中国の都市について触れてのことだ。「中国は世界にウィルスを与えたが、それは常に中国に戻ってきそうだった。(中略)」と付け加えた。)

ところで、先に見た Bravo (2017: 18)は、"*puede que* + 接続法" を *quizás, tal vez* (たぶん、おそらく)と同じ副詞句 (locución adverbial) と見なしていた。同様に、RAE の *Diccionario panhispánico de dudas* (オンライン版、以下 *DPD*)[13]でも、同表現は *quizás* と同じ意味の副詞句として振る舞い、直説法現在 3 人称単数の *puede* によってのみ表され、それ以外の時制は用いるべきではないと指摘されている[14]。しかしながら、この認識的法表現においても、以下のように、ps による表出が確認された。

(21) Sobre su futurible rival en unas elecciones, Isabel Díaz Ayuso, Ayala opina que es una mujer "liberal" y "muy de derechas" que tiene la capacidad "de convertir sus errores en virtudes": "Pudo que hubiera algún momento en que la menospreciáramos, pero los resultados de las elecciones son objetivos y tenemos que

---

13 Cf. https://www.rae.es/dpd/

14 *Diccionario pahispánico de dudas* (オンライン版)の該当箇所は次のとおり。"3. ***poder (ser) que*** + subjuntivo. Esta construcción, que se da solo en tercera persona del singular, expresa posibilidad ('ser posible que'). (...); pero cuando el verbo *ser* está elidido, el verbo *poder* solo se conjuga en presente de indicativo, dando lugar a la expresión *puede que*, que se comporta en la práctica como una locución adverbial de sentido análogo a *quizá*: «*Puede que me arrepienta de lo que he hecho*» (VqzFigueroa *Taberna* [Esp. 1994]); «*Puede que tengas razón*» (Victoria *Casta* [Méx. 1995]); por tanto, en este caso no debe utilizarse el verbo *poder* en otros tiempos del indicativo distintos del presente: ⊗«*Podía que su misión consistiera en estar de licencia en la ciudad*» (Cohen *Insomnio* [Arg. 1986]). " (3. ***poder (ser) que*** +接続法. この構造は 3 人称単数形だけで表されるが可能性(「が起こりうる」)を表す。(中略); しかし、動詞 *ser* が省略されると、動詞 *poder* は直説法現在だけで活用し、*puede que* という表現になるが、実際は *quizá* に類似した意味の副詞句として振る舞う。「私はたぶん自分のしたことを後悔する。」(VqzFigueroa Taberna [Esp. 1994]);「たぶん君の言うことが正しい。」(Victoria *Casta* [Méx. 1995]); したがって、この場合、動詞 *poder* は直説法の現在以外の時制では用いられない。「たぶん彼の任務は街で休暇を取ることだった」) この *Diccionario pahispánico de dudas* (オンライン版) の説明では、"*poder que*+接続法" の *poder* は直説法現在形しか取ることができず、その imp によって表出された実例には ⊗ の印がつけられているが、Bravo (2017)では *poder* の imp による表出は容認されていた点に注目されたい。

aprender de ellos". (https://www.elespanol.com/espana/politica/20210925/ayala-lobato-aspirantes-reconstruir-psoe-madrid-ayuso/613439994_0.html)
(将来の選挙のライバルである Isabel Díaz Ayuso について、Ayala は「自分の間違いを長所に変えることができる「リベラル」で「非常に右」の女性だと考えている。「私たちは彼女のことを過小評価したときもあるのかもしれなかったが、選挙の結果は客観的で、私たちはそれから学ばなければならない」)

一方、*DPD* は、"*puede que* +接続法" と同じところで説明している "*puede ser que* +接続法" (...かもしれない)の *puede* の時制に関して、"En la norma culta española y americana, cuando el verbo *ser* está explícito, es posible conjugar el verbo *poder* en la mayor parte de los tiempos del indicativo (*pudo ser que*, *podía ser que*, *podría ser que*, *ha podido ser que*, etc.)" (スペインとアメリカの教養ある規範では、動詞 *ser* が明示されているときには、動詞 *poder* は直説法のほとんどの時制で活用することができる (*pudo* (*poder* の ps) *ser que*, *podía* (*poder* の imp) *ser que*, *podría* (*poder* の過去未来) *ser que*, *ha podido* (*poder* の現在完了) *ser que*, etc.)と指摘している。確かに、本稿の観察においても、"*puede ser que* + 接続法" の ps による表出は "*puede que* +接続法"よりも数が多かった。"*puede que* +接続法" の ps による表出は CREA、CORPES では確認できず、Google の「詳細検索」でいくつかの用例が確認されただけだったが、"*puede ser que* +接続法" の ps による表出は CREA で 6 例、CORPES でも 13 例が確認されたからである[15]。以下はその 1 例である[16]。

(22) No le dio tiempo, porque el artefacto estalló. Puede que el mecanismo de relojería provocara la explosión y que el destino no quisiera perdonar a Javier Castro. También <u>pudo ser que</u> el artefacto estallara al golpear el sillón del limpiabotas. Mala suerte. (CREA, *El Mundo*, 03/04/1994)
(彼は間に合わなかった、装置が爆発したからだ。時限爆弾のメカニズムが爆発を引き起こし、運命が Javier Castro を許したくなかったのかもしれない。また、靴磨きの椅子を叩いた際に装置が爆発したのかもしれなかった。)

最後に "*haber (la) posibilidad de que* + 接続法" (...という可能性がある) の ps による表出の可能性を見る。この認識的法表現も、以下のように、ps による表出は可能であることが確認された[17]。

(23) Sin embargo, hasta el ataque a Pearl Harbor, las dos corrientes persistían y hasta <u>hubo la posibilidad de que</u> fueran compaginables. Por esto fue posible que personas como el almirante Yamamoto, que dirigió

---

15 CREA における "*pudo/Pudo ser que* +接続法"は全部で 10 例であったが、そのうち 4 例は *¿Cómo pudo ser que...?*といった義務的法表現であり、同様に、CORPES においても"*pudo/Pudo ser que* +接続法" は全部で 18 例であったが、そのうち 5 例は *¿Cómo pudo ser que...?*の義務的法表現であった。
16 (21)は興味深い例である。同じ爆発場面を扱った連続した二文のうち、ひとつは ps によって表出された認識的法表現 "*pudo ser que* + 接続法" であり、その直前のもうひとつは *poder* の現在で表出された認識的法表現 "*puede que* + 接続法" だからである。
17 なお、この認識的法表現における ps と imp の表出を見ると、CREA では、ps 5 例、imp 8 例、CORPES では、ps 1 例、imp 21 例であった。また、Google の「詳細検索」を地域「スペイン」で行うと、ps 185 例、imp 266 例であった。この検索結果から、"*haber (la) posibilidad de que* + 接続法" (...という可能性がある)という認識的法表現は ps による表出が珍しくないといえる。

la operación de Pearl Harbor, combatieran convencidos de que meterse en una guerra con Estados Unidos era un disparate. (CREA, *La Vanguardia*, 02/09/1995)
(しかしながら、真珠湾攻撃まで、2 つの流れは維持し、それらは両立できるという可能性さえあった。このことから、真珠湾攻撃を指揮した山本大将のような人々は合衆国と戦うことは馬鹿げていると確信しながら戦うことができた。)[18]

この "*haber (la) posibilidad de que* + 接続法" (...という可能性がある) の ps による表出には、次の例のように、"*haber (la) posibilidad de que* + 接続法" という事態が生起した時点を示す副詞句と共起したものもあった。

(24) Hace más de 5 años hubo la posibilidad de que yo fuera al Barcelona, con Mendoza de presidente, pero llegué a un acuerdo con él y no fui. (CREA, *El Mundo*, 10/11/1994)
(5 年前、僕は Barcelona に行く可能性があった、会長は Mendoza で、しかし、彼と合意したので、(Barcelona には)行かなかった。)

4. 3. 「スコープ逆転」を応用すると問題になるその他の事例

本項では、これまでの認識的法表現の時制解釈をそのまま応用すると、スペイン語の時制形式の実態とは齟齬を起こし問題になる事例を見る。まず、次の Laca (2021: 1, 下線は筆者) のあげた例文とその解釈を見られたい。(下線、破線は筆者)

(25) El ladrón pudo haber entrado por la ventana.
(i) 'El ladrón tuvo la posibilidad de entrar por la ventana (pero no lo hizo)'. (LECTURA CONTRAFACTUAL)
'泥棒はその窓から入る可能性を持った（しかし、そうしなかった）[泥棒はその窓から入ることができたのに（しかし、そうしなかった）、筆者注]' (反実的読み)
(ii) 'Por lo que sé, no descarto que el ladrón haya entrado por la ventana'. (LECTURA EPISTÉMICA)
'私の知るところによれば、泥棒がその窓から入ったことを排除はしない [泥棒はその窓から入ったのかもしれない、筆者注]' (認識的読み)

Laca (Ibid.) によれば、(25) の下線部のように、認識的法動詞 *poder* が補語として完了不定詞を取り ps で表出されると、(i)のような反実読みと(ii)の認識読みの 2 つの読みが可能だという。本稿が問題にしたいのは、(ii)の認識読みのときの *pudo haber entrado* の時制解釈である。

先に見た「スコープ逆転」に従うならば、認識的法動詞の時制形式はその補語の時制を示したものとなるので、(25)の補語部分の時制は *hubo entrado* という "助動詞 *haber* + 過去分詞"からなる完了形の助動詞が ps で表された *pretérito anterior* (直前過去)になるはずである。一方、この直前過去という時制は、一般に、*tan pronto como*、*en cuanto* といった「...するや否や」を意味する語句とともに用いられ、ある時点の直前に完了した事態を表すとされているが、現代スペイン語ではほとん

18 この例も興味深い。問題の認識的法表現の直後では、義務的法表現の "*ser posible que* + 接続法" が ps によって表出されているからである。

ど使用されず、代わりに ps が用いられるという[19]。そのような事情もあってか、Laca の提示した(25)(ii)の認識的読みの解釈では、*pudo haber entrado* の *haber entrado* が *haya entrado* という接続法現在完了形にパラフレーズされている。しかし、「スコープ逆転」というメカニズムを厳密に適用するならば、この *haya entrado* というのは *pudo haber entrado* のパラフレーズというよりは、*puede haber entrado* という現在で表された認識的法動詞 *poder* の補語のパラフレーズである。また、Laca (Ibid.) は Bosque (2000)[20] を参照しながら、*poder* の補語の完了形は余分(redundante)のように見えるとも述べており、実際、(25)の認識的読みのパラフレーズは、以下のように、ps で表された認識的法動詞 *poder* の補語が不定詞のときのそれと同じものとなっている。(下線、破線は筆者)

(26) El ladrón <u>pudo entrar</u> por la ventana.

(i) 'El ladrón logró entrar por la ventana'. (LECTURA IMPLICATIVA)
泥棒はその窓から入ることを達成した。(含意的読み)

(ii) 'El ladrón tuvo la posibilidad de entrar por la ventana (pero no lo hizo)'. (LECTURA CONTRAFACTUAL)
'泥棒はその窓から入る可能性を持った(しかし、そうしなかった)[泥棒はその窓から入ることができたのに(しかし、そうしなかった)、筆者注]'(反実的読み)

(iii) 'Por lo que sé, no descarto que el ladrón <u>haya entrado</u> por la verdad'. (LECTURA EPISTÉMICA)
'私の知るところによれば、私は泥棒がその窓から入ったことを排除はしない [泥棒はその窓から入ったのかもしれない、筆者注]'(認識的読み)

しかしながら、*pudo haber entrado* 中の完了形は余分なものであり、認識的解釈の *pudo haber entrado* の時制解釈は *pudo entrar* のそれと同じと認めることは本当に妥当なのだろうか。扱う認識的法動詞は異なるものの、Bravo (2017:71) は、この問題について、次のような指摘をしている。

(27) Es posible también que, (...), tanto el modal como su complemento estén marcados para el pasado con un tiempo aspectualmente perfectivo,como en ***Tuvo que*** *haber filtrado la información a la prensa un miembro de la policía*. En la lectura epistémica, (...), esta oración significa 'Es seguro que quien filtró la información a la prensa fue un miembro de la policía'. Esta combinación, no obstante, plantea algunos problemas pues no resulta evidente cómo se relaciona la información de pasado que aporta la morfología flexiva realizada en el modal con la información de aspecto perfectivo realizada en el complemento del modal.

(また、***Tuvo que*** *haber filtrado la información a la prensa un miembro de la policía* のように、法動詞とその補語の両方がアスペクト的にパーフェクティブな過去の時制で表示されていることも可能である。認識的読みでは、この文は「メディアにその情報をリークしたのが警察のメンバーだったというのは疑いない」を意味する。しかしながら、この組み合わせはいくつかの問題を引き起こす。というのも、法動詞における屈折的形態素が差し出す過去の情報と法動詞の補語のパーフェクティブ・アスペクトの情報がどのように関係づけられるかが、結果的に、明ら

---

19 Cf. *NGLE*, 23.16i-23.16n, pp.1789-1791.

20 Laca (2021: 1)では Bosque (1999)となっているが、正しくはレファレンスにもあるように Bosque (2000)である。

かではないからである。)

(27)の記述は、Bravo (Ibid.)にとって、ps で表出された認識的法動詞の補語が完了不定詞のときの時制解釈は問題になることを示したものである。Bravo (Ibid.) は、Laca (2021: 1)のように、認識的法動詞の補語に置かれた完了不定詞が時制的に余分なものだとは述べていないが、(27)の直後で、次のように述べている。

(28) (...) [S]e trata de la misma información, en este caso de carácter temporal, que se expresa en dos lugares diferentes, de la misma forma que se dice *entrar en, interponerse en o cooperar con.*
(問題は同じ情報、ここでは時間的性質の同じ情報が 2 つのことなる場所で表されているということであり、それは *entrar en* (...に入る)、*interponerse en* (...の間に入る)、*cooperar con*(...と協力する)のようにいうのと同じである。)

(28)によれば、Bravo (Ibid.)は、認識的法動詞の ps とその補語の完了不定詞は「(時間的性質の)同じ情報」であるが、異なる 2 つの場所で表されていると解釈しているのが分かる。また、それは例えば、*cooperar con* (...と協力する)において「...とともに」を意味する語が前置詞 con と接頭辞 co- の 2 つの場所において表されているのと同じ現象と捉えていることも分かる。いずれにしても、Bravo (Ibid.)は、認識的法動詞の ps とその補語の完了不定詞がそれぞれ異なる時間的情報を表したものとは考えていないことは明らかである。しかし、ここで無視できないのは、"認識的法動詞 *poder* +完了不定詞" の *poder* は ps によって表出されるだけでなく imp によって表出されることもあるという事実である。以下の例を見られたい。

(29) ¡Y entonces encontró cerrada con llave la puerta del armario donde su esposa guardaba los sombreros! Solo podía hacer una cosa: coger uno de los sombreros de la doncella. La policía podía haber llegado demasiado pronto. (山村 2018: パラレルコーパス 3556-3557 行)
(で、そのとき妻が帽子をしまってある戸棚のドアが鍵で閉まっているのに気づいたんだ。彼ができることはただひとつ。メードの帽子のひとつを取りに行くことだけだった。警察があまりに早く到着したかもしれなかったし。」

(29)は山村(2018)が作成した Agatha Christie の *The Thirteen Problems* のパラレルコーパスからの抜粋である。下線部分は認識的法動詞 *poder* の imp が *llegar* (到着する)の完了不定詞を補語としたものである。因に、この部分の英語の原文は *The police might have arrived too soon.* となっている[21]。一方、同じパラレルコーパスには、次のように、認識的法動詞 *poder* の ps が完了不定詞を補語としたものもある。なお、この事例における *pudo haberla reconocido* の英語の原文は *Mrs Pritchard might have recognized her in spite of the disguise*. であり、認識的法動詞 *poder* が imp の (29) の英語の原文と同じ "*might have* +過去分詞" となっている[22]。

---

[21] (29)の原文は次のとおり。And then he found the hat cupboard locked! There was only one thing to be done, he fetched one of the poor girl's own hats. The police might have arrived too soon.'
[22] (30)の原文は次のとおり。'Rather a bold step to take,' said Miss Marple, 'because Mrs Pritchard might have recognized her in spite of the disguise - though of course if she had, the nurse could have pretended it was a joke.'

(30) -Un paso muy arriesgado -dijo la señorita Marple-, ya que la señora Pritchard pudo haberla reconocido a pesar de su disfraz. Aunque, de haber sido así, la enfermera hubiera dicho que se trataba de una broma.
(Ibid.: パラレルコーパス 2192行)
(「それはとても危険な一歩だったわ」とマープル嬢は言った。「プリチャード夫人は、変装にも拘わらず、彼女に気づいたかもしれなかったから。とはいえ、そうなったら、看護師は冗談だと言ったでしょうけど。」)

周知のように、スペイン語の過去時制の単純形には ps と imp の違いがあるが、(29)の *podía haber llegado* と(30)の *pudo haberla reconocido* の時間情報の違いは、認識的法動詞における ps と imp の違いのみにあるように見える。他方、先に見たように、Bosque (2000)、Laca (2021:1)は ps で表された "認識的法動詞 *poder*+完了不定詞"における完了不定詞は、時間情報という観点からは余分だとしていた。しかし、同じ "認識的法動詞 *poder* +完了不定詞"の imp による表出については、そのような指摘はされていない。そこで、"認識的法動詞 *poder* +完了不定詞" の imp による表出の補語部分に「スコープ逆転」が適用されるとすると、その時間情報は "助動詞 *haber* の imp+ 過去分詞" からなる過去完了(pluscuamperfecto)と解釈されることになろう[23]。以上のことをまとめるならば、"認識的法動詞 *poder*+完了不定詞"の ps による表出の補語部分の時間解釈は ps、その imp による表出の補語部分の時間解釈は過去完了ということになる。

ところで、ps によって表出される "認識的法動詞 *poder* +完了不定詞" の完了不定詞の時間情報は余分という主張に従うならば、その時間解釈は、ps によって表出される "認識的法動詞 *poder* + 不定詞" と同じということになる。一方、(29)(30)の事例が抽出されたパラレルコーパスには、この "認識的法動詞 *poder* +不定詞" の ps による表出の事例も確認されている。以下の例を見られたい[24]。

(31) Nos levantamos los tres para apearnos y el señor Sanders perdió el equilibrio, se cayó hacia su esposa y la hizo caer escaleras abajo. Por fortuna, el cobrador era un hombre fornido y logró sujetarla. -Pero pudo tratarse muy bien de un accidente. (Ibid.: パラレルコーパス 3243-3245行)
(私たち3人は降車するため立ち上がったんだけど、サンダース氏がバランスを失って妻の方に倒れたので、彼女は階段の下に落ちたの。幸いにも、車掌がたくましい人だったので彼女を支えることができたわ。－しかし、十分事故になったかもしれない。)

ps によって表出される "認識的法動詞 *poder* +完了不定詞" の完了不定詞の時間情報は余分という主張に従うならば、ps によって表出される "認識的法動詞 *poder*+完了不定詞" と ps によって表出される "認識的法動詞 *poder* +不定詞" の間には時間情報の違いがないということになるが、それは同時に、当該二形式の間の形態的相違は意味の違いには対応しないということをも意味するこ

---

23 この解釈は、"認識的法動詞 *poder*+完了不定詞" の imp による表出が「時制の一致」の結果とも、また、自由間接話法において出現したものとも見なされない場合のものである。
24 (31)の原文は次のとおり。We all three got up to get off and Mr Sanders lost his balance and fell right against his wife, sending her headfirst down the stairs. Fortunately the conductor was a very strong young man and caught her.' 'But surely that must have been an accident'

とになる。しかし、そのような解釈は、形式が異なれば意味も異なるという立場からすれば、なかなか納得しにくいものである。

以上、 ps によって表出される "認識的法動詞 *poder* +完了不定詞" に見られる問題を見てきたが、それらは次のようにまとめられる。第一に、ps によって表出される "認識的法動詞 *poder* +完了不定詞" の完了不定詞部分の時間情報は余分と解釈されているが、imp によって表出される "認識的法動詞 *poder* +完了不定詞" の完了不定詞についてはそのような解釈はなされていない、第二に、ps によって表出される "認識的法動詞 *poder* +完了不定詞" の完了不定詞の時間情報が余分と解釈されるならば、同表現と ps によって表出される "認識的法動詞 *poder*+不定詞" の時間情報は同じものと見なされることになるが、その解釈は形式が異なれば意味も異なるという立場とは相容れないものである。

5. まとめ

ここまで、主に認識的読みの法動詞 *poder* を対象にしながら、スペイン語における認識的法表現とその時間解釈について見てきた。それは、次のようにまとめることができる。

- Bravo (2017) によれば、法性(Modalidad)とは、命題によって表された意味内容を「起こりうる(posible)」あるいは「必然的に起こる(necesario)」ものと形容する(calificar) 言語範疇であり、動詞、形容詞、副詞、名詞など超範疇的に表されるものである。
- Bravo (2017)によれば、法性はその源(fuentes)によって、主に、真理的法性(modalidad alética/apódica)、認識的法性(modalidad epistémica)、義務的法性(modalidad deóntica)、動的法性(modalidad dinámica)に分類される。
- Bravo (2017)によれば、認識的法動詞においては時制が法性のスコープ内にあり、認識的法動詞に現れる時間情報は、法動詞の時間情報ではなく、その補語となる事態の時間情報を表している。一方、認識的法動詞自体の評価時は発話時あるいはそれ相当に機能する過去の時点にあり、この制約により、認識的法動詞の時制パラダイムは直説法現在形と imp に限られる。
- Bravo (2017)および Laca (2021)は、認識的法動詞では、意味構造における法性と時制のスコープ (法性＞時制)と形態論的構造における法性と時制のスコープ(時制＞法性)が一致せず、認識的法動詞の時制形式はその補語となる事態の時間情報を示すこと、また、認識的法動詞自体の評価時は発話時あるいはそれ相当に機能する過去の時点にあり、この制約により、認識的法動詞の時制は直説法現在と imp に限られる、と指摘している。
- Laca (2021)は、認識的法動詞に見られる時制形式と時間解釈の不一致は、これまで一般に「スコープ逆転」というメカニズムで説明されてきた、と指摘している。また、先行研究によれば、この「スコープ逆転」というメカニズムの有効性は、一般に imp で表出される年齢表現のように、それを表出する時制に制約がある命題の時制と認識的法動詞の時制が一致することによって示される、とも述べている。
- 本稿は、上述のような、認識的法動詞に見られる従来の時間解釈の妥当性を改めて検証した。その結果、次のことが明らかになった。
  1. 一般に imp で表出される時刻表現、年齢表現をその補語とした認識的法動詞 *poder* も ps で表出されることがある。これは先行研究が主張してきた「スコープ逆転」のメカニズムの反例となる。

2. 先行研究によれば、認識的法動詞の評価時は発話時あるいはそれ相当に機能する過去の時点にあることから、認識的法動詞の時制は直説法現在と imp に限定されるということだった。しかし、認識的法動詞と同じく認識的法性を表すと思われる他の表現を観察すると、ps によって表出されるものが確認された。
3. "認識的法動詞 + 完了不定詞" が ps によって表出されるとき、「スコープ逆転」のメカニズムに従うならば、補語の時間情報は "助動詞 *haber* + 過去分詞"の ps による表出、すなわち、直前過去で表されることになるが、現代スペイン語においてこの直前過去はほとんど用いられず ps に取って代わられている。一方、先行研究では "認識的法動詞 + 完了不定詞" が ps によって表出されるとき、完了不定詞の時間情報は余分(redundante)だと主張されている。すなわち、先行研究の主張に従えば、"認識的法動詞 + 完了不定詞" の ps による表出と"認識的法動詞 + 不定詞" の ps による表出の時間情報に違いはないということになる。しかし、この解釈は形式が異なれば意味も異なるという立場とは相容れないものである。

以上の検証結果は、認識的法表現における時制形式と時制解釈をその実態に即して説明するためには、さらなる考察が必要であることを示唆するものである。

参考文献

Bravo, Ana (2017): *Modalidad y verbos modales*, Madrid, ARCO/LIBROS, S.L.

Laca, Brenda (2006): "Tiempo, aspecto y la interpretación de los verbos modales en español", *Lingüística* (ALFAL) 17, 9-43.

----- (2007, preprint): "Temporalidad y modalidad", halshs-00175676, 1-17.

----- (2014): "Epistemic Modality and Temporal Anchoring", *ReVEL*, special issue 8, 76-105.

----- (2021, preprint): "Verbos modales y núcleos aspectuo-temporales en español" , 1-21. DOI: 10.13140 / RG.2.2.20950.57927

Real Academia Española/Asociación de Academias de la Lengua Española (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa.

Rodríguez-spiñeira, María-José (2010): "Modalidad, gramática y discurso: posible, probable y sus antónimos", Rodríguez-Espiñeira, María-José (ed.), *Adjetivos en discurso Emociones, certezas, posibilidades y evidencias*, Cap. 5, Santiago de Complstela: Universidade, Sevizo de Publicacións e Intercambio Científico, 181-253.

コーパス

山村ひろみ(編)(2018) 科研費（基盤研究(C) 課題番号 JP15K02482)「現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究」研究成果報告 CD 第 1 部 Agatha Christie, *The Thirteen Problems* のパラレルコーパス

REAL ACADEMIA ESPAÑOLA: Banco de datos (CORPES XXI) [en línea]. *Corpus del Español del Siglo XXI (CORPES)*. <http://www.rae.es> [最終アクセス日：2022.12.10]

REAL ACADEMIA ESPAÑOLA: Banco de datos (CREA) [en línea]. *Corpus de referencia del español actual*. <http://www.rae.es> [最終アクセス日：2022.12.10]